

# 平成24年度 鴨川アクションプランフォローアップ委員会の概要

## ■開催日時

平成25年1月30日(水) 14:00～16:30

## ■場 所

京都平安ホテル 朱雀の間

## ■出席者

委員 8名(敬称略、五十音順)

中川 博次 (京都大学名誉教授) [委員長]

丘 眞奈美 (京都ジャーナリズム歴史文化研究所代表、放送作家)

勝矢 淳雄 (京都産業大学名誉教授)

川崎 雅史 (京都大学大学院教授)

金田 章裕 (京都大学名誉教授、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構長)

町田 玲子 (京都府立大学名誉教授)

水野 歌夕 (写真家)

吉村 真由美 (独立行政法人 森林総合研究所主任研究員)

(欠席)

戸田 圭一 (京都大学防災研究所教授)

## ■資 料

【資料1】 平成24年度 鴨川・高野川における工事実施状況について

【資料2-1～5】 平成24年度 主な工事実施箇所について

【資料3】 鴨川高水敷整備の状況について

【資料4】 水制工設置後のモニタリングについて

【資料5】 鴨川ギャラリーの整備について

【資料6】 鴨川における自然環境等のあるべき姿について

## ■委員会議事

### ◇鴨川・高野川における河川整備状況について【資料1】【資料2-1～5】【資料3】

今年度実施している工事の概要説明を行った。

(委員)

- ・ 三条四条間の高水敷について、整備後の評価はどうか。
- ・ 堀川合流部の通路橋は地域にどのようなメリットがあるのか。

(事務局)

- ・ 芝生部分はよく使ってもらっている。園路と芝生の境界付近で芝生の付きが悪く、何らかの対策を考えていきたい。
- ・ 通路橋は、従来無かった鴨川と堀川右岸の公園とのアクセスを確保できる。

(委員)

- ・ 土系舗装は歩きやすいが、強度の面ではどうなのか。

(事務局)

- ・ 土の中に樹脂を練り込んだ樹脂系舗装で、出水時の流失は無いものと考えている。自転車による轍は生じる。

(委員)

- ・ 三条四条間の工事中の仮設フェンスの再利用はしないのか。鴨川ギャラリーとの内容との違いは。

(事務局)

- ・ フェンスでの展示は、児童園児らの絵をお借りして写真にシラミネート加工した。内容は特定の題材で決めたものではない。ギャラリーは歴史的文化的なものを展示することになっている。

(委員)

- ・ 西高瀬川背割り堤部について、植栽すれば府民の目も向けられることになる。例えば、シンボル樹の愛称を公募するとか、何らかの仕掛けも考えてみてはどうか。

(事務局)

- ・ 現在、堀川合流部では公園と通路橋に愛称を付けることを考えており、自治会に投げかけている。西高瀬川背割り堤部のシンボル樹である桜についても、愛称募集を検討したい。

(委員)

- ・ 整備済み区間で自転車が速度を上げて走行している。自転車のマナーに対する何らかの考えは。

(事務局)

- ・ 三条四条間で注意看板を設置し、実態調査もしている。今後、府民会議にも諮って意見を聴き、対応を考えていきたい。

(委員)

- ・ 府民会議でも同様の話が上がっており、いろいろの意見がある、という状況である。

#### ◇鴨川における新たな取り組みについて【資料4】【資料5】

「水制工設置後のモニタリング」と「鴨川ギャラリー」について説明を行った。

(委員)

- ・ 同形式の水制工で、設置後の違いが生じているが(鴨川①と⑤)、この原因は。

(事務局)

- ・ 両方とも落差工直下であるが流れが異なっており、河床が、浅く安定したところと深く安定したところの差によるものと考えている。

(委員)

- ・ 中州の除去と水制工設置による中州の安定は、矛盾しないか。

(事務局)

・ 中州除去の結果、寄州も流出し、部分的に護岸の基礎部が想定以上に洗掘される現象が出てきたため、水制工で深掘れを抑制するという実験的な取り組みを始めたもの。将来的に水制工撤去が必要になったとしても、その対応は容易でもある。

(委員)

- ・ 府民会議での意見では、昭和初めの出水以後に形成されてきた河川環境は残すべき、つまり中州はいくらかは残すべき、というもの。
- ・ 時代とともにニーズも変わる。治水上は、洪水の時に支障が無ければ問題なしといえる。鴨川自体の土砂流出能力の全てを制御するとなると大変である。

(事務局)

- ・ 水制工の一番の目的は護岸の洗掘防止で、自然の力で堆積と流失を程よく保つ方法を探っていく。土砂管理の解析等はできておらず、これは今後の課題としたい。

(委員)

- ・ 鴨川で、鮎を戻そうという運動をしている方々が書かれていたのを見たが、ああいった魚道といったものでコントロールができるのか。良い取組と思うし、放送番組でも紹介されていた。

(事務局)

- ・ 鴨川の鮎は、下流からの遡上と疎水から落ちてくる2種がいたと思われる。現在の状況でも落差工を一定量遡上していると確認されており、魚道を設置することで遡上を促すことは可能である。問題としては、上流に鮎が生息できる環境を確保できるかどうか、魚道設置により鴨川の景観が変化すること、落差工で遮断している外来種の影響が生じてくる、といったものがある。

(委員)

- ・ ギャラリーについて、予想図等がないと議論のしようがない。
- ・ 休憩できる、とはベンチを設置するのか。

(事務局)

- ・ 完成イメージ図は、すぐにお送りする。ベンチは、自然石や木材を利用した簡易なもの。

(委員)

- ・ ギャラリーは府民会議でもすごく議論されている。結果について、今後報告してもらえれば。

#### ◇鴨川における自然環境等のあるべき姿について【資料4】

あるべき姿のホームページによる情報提供などの説明を行った。

(委員)

- ・ 上流域も範囲に取り込むべきではないか。府民会議では上流にある産廃施設や規制の無い畜産施設に対する懸念の意見がある。
- ・ 上流域や源流域も、鴨川の文化を考える上では、文化宗教歴史的に意味がある。

(事務局)

- ・ 山間部の自然環境が豊かな区間は、明らかに、今の自然を守っていくべき、という方針になると考えられる。今の対象区間は、自然、治水、都市内のオープンスペース、景観など多種多様な価値観のもとで鴨川をどうしていけばよいのか、ということでの区間設定をしたものである。

(委員)

- ・ エリアと考え方を再度整理すること。
- ・ ホームページ用の写真等の著作権についての整理が必要である。

(事務局)

- ・ 整理して不適切なところは修正する。

#### ■ 総 評

様々な試行は有りがたいことであり、水制工は今後とも長いスパンで検証していつてもらいたいし、今後はほかの河川にも拡げていつてほしい。

利用者に愛着が湧くような鴨川にしてほしいと思う。今の鴨川はトイレが近くになく女性が歩きにくい、というイメージがある。

「おとな」の意見が中心になってしまっていると感じる。鴨川が綺麗になりすぎて面白くない、と感じている「子ども」の意見を聴いてもらえる場をつくってもらいたい。

「京都の」鴨川は「日本の」鴨川でもあり、世界に発信していける川だし、そうしていくべきだと思う。

フォローアップのPDCAサイクルのなかでは、もし失敗したとしてもその経過理由を公表して府民の理解を得て、その先をうまく進めていつてほしい。

鴨川は長い間大きな洪水がなかったが、今後どうなるかはわからない。ハードのみでなくソフトも合わせての対応を、今後ともよろしく願いたい。

#### ■ 事務局より

本委員会は平成25年度までということになっている。

平成26年度から二期目に入っていくことになるが、準備を来年度(平成25年度)から行っていく必要がある。大まかな予定としては、8月頃までに議会に案をあげるために、来年度の早い時期に委員会を開催することにした。

今後、中川委員長と相談しながら進めることとしたい。